

『遠野物語』と遠野郷民俗誌の間

—地名、人名の内容項目分類を通して見えてきたもの—

小田富英

はじめに

柳田国男没後五〇年にあたる二〇一二年八月二三、二四日、遠野市において「国際フォーラム 二一世紀における柳田国男」と題したシンポジウムが開かれた。この会は、その二年前の『遠野物語』発刊百周年の記念行事をきっかけとしたロナルド・A・モースと赤坂憲雄の発案によって実現できたもので、アメリカ、カナダの柳田研究者五人と、日本から赤坂憲雄、福田アジオ、三浦佑之、そして私の四人がパネラーとなった。この記録は、『遠野学』その他で発表されているので読んでいただきたいのだが、私にとっては八人の研究者の方たちとの何気ない会話の方が、大いに刺激となった。

その時から、頭から離れなかった言葉が、『遠野は、『遠野物語』の存在が大きすぎて

民俗調査がされていないのでは」と、「民俗学のスタートが『後狩詞記』の方に力点が置かれているのでは」といったものがあった。もとより私は、民俗学研究者ではないので、この手の論議に入るのをいつも躊躇うのだが、日が経つにつれ、本当にそうなのだろうか、別の視点から検証すれば何か見えてくるのではないかとの思いが強くなったのである。

今回、地名研究者遠野大会の前に、私なりの視点からの検証をすることで、大会前の問題提起を担いたいというのが、本稿のねらいである。

二、『遠野物語』を範とした採集調査

1、小池直太郎の場合

柳田国男を支えた信州人脈のなかにあって、胡桃沢勘内らの重鎮に続く若い世代の代表者に、小池直太郎という小学校の教員

がいた。明治二七年（一八九四）に生まれ、長野師範卒業後から、研究熱心でめきめき頭角を表した小池は、胡桃沢を介して柳田に最初の採集記録『小谷四ヶ庄伝説集』を送ることになる。大正九年（一九二〇）一月一二日、柳田は、届いたその日のうちに読み通し、胡桃沢に小池にお礼を言っただけで、ほしいと葉書を出している。まだ三〇歳にならない小池にとって、興奮した出来事であったに違いない。その興奮が冷めやらない一月に、小池は上京して柳田に会っている。拙稿の「柳田国男年譜」のこの日の条は、以下の通りである。

「一月二六日 永楽倶楽部で開かれた第二回『同人』小集の集まりに、岡村千秋、松宮春一郎、尾佐竹猛や弟の静雄らと共に参加する。(略) 上京してきた小池直太郎とこの会で初めて会い、他の同人に紹介する。」(『柳田国男全集』別巻1、筑摩

書房、二〇一九年三月刊)

ここで出会った岡村千秋が、小池の小谷の伝説採集話を、炉辺叢書の一冊『小谷口碑集』として刊行した郷土研究社社主である。柳田の指導を仰いだ小池は、炉辺叢書のリストに加えてもらった喜びを胸に、再度、小谷村に採集調査に入ることになる。その時、『遠野物語』を小脇に抱えて調査に入ったことが、私には、ことのほか大きな意味をもつように思われるのである。胡桃沢友男は、この意味を次のように述べている。

「小池が小谷へ『遠野物語』を携行して行ったのは、『小谷四ヶ庄伝説集』は質量ともに豊富な口碑を集めて予想以上の成績を収めたけれども、集めたままを村別に謄写版刷りにしただけであったので、これを後世にのこして学問に役立てるためには、『遠野物語』がよいお手本と考えたからであろう。」(胡桃沢友男「小池直太郎と『小谷口碑集』」『信濃』第三八巻第一二号、昭和六一年一二月)

言うなれば、小池は、『遠野物語』の民俗の記述のよき理解者で、それに留まらず、柳田が目指す口碑採集技術の実践者である

うとした数少ない民俗学者だった。

小池の『小谷口碑集』が炉辺叢書の一冊として刊行されたのは、大正一一年六月、柳田がジュネーブに着いたころであった。送られて来た同書を読んで、柳田はすぐに小池と胡桃沢に感想を送っている。

成城大学柳田文庫には、表紙に柳田の自筆で「索引用」と書かれた『小谷口碑集』が保管されている。ジュネーブで読んだ本ではないのかもしれないが、帰国してから時間をかけて索引項目に「」をつけ、上段余白に×と、項目名の書き込みがある書である。例えば、「鬼没右衛門」の話からは、

北城村字青鬼に住む新兵衛という獵師の話が三話続く。『遠野物語』の獵師、佐々木嘉兵衛を連想するような話である。それらの話には、「獵師」「狼(やまいぬ)」「蛇と犬」「杖成長」「巨人(おおひと)」「餅と白い石」などの記入がある。他の話にも、「長者屋敷」や「山男のさとり」など、柳田自身を選んだ索引項目が丁寧に記されている。

柳田は、自分の後に続く、若い息吹を実感していたに違いない。柳田の「炉辺叢書解題」と、小池の遺作『夜啼石の話』の序文から、この時の柳田の気持ちを読み解いて

みたい。

「小池君は気力ある若き研究者であるが、其熱心に先づ動かされて、材料蒐集の任に当たつたのは、山間の各部落に働いて居る分教場の教師たちであつた。多くの古伝説の外に、現行の行事儀式、生活技術から、歌謡、童話、謎々方言の類に至る迄、有る限の無形遺物を逃すまいとして居る努力は、随かに尋常好事の徒の企及する所が無い。他の諸国の山村の調査にも、応用させて見たい方法が多く見える。」(『炉辺叢書解題』『柳田国男全集』第二二巻所収)

「考えてみれば、こういう仕事は、なにも信州のためにということではなく、信州でこういう仕事を飽きずにつづけていた人があるということを、むしろ他の県の人たちに知らせたいので、つまり私らのように、日本の国全体を舞台として学問を進めて行くという考え方に、一番最初に参加したのが小池君で、そういう意味でも、小池君の考え方とか業績とかは、今日見ても新しいものである。今日、小池君を知っているものは、もう僅かになつてしまつたが、幸に私だけは長命をしたから、こういうことに序文が書けるのを大変ありがたいと思う。」

(小池直太郎『夜啼石の話』筑摩書房、昭和三二年九月刊)

『夜啼石の話』は、昭和一八年(一九四三)五〇歳で亡くなった小池直太郎の十三回忌を前にして、柳田の推薦で筑摩書房から刊行された遺作であり、この序文には、同時期、胡桃沢勘内、岡村千秋、守随一、倉田一郎、山口貞夫らを次々と失っていった柳田の悲しさも隠されているのである。

2、早川孝太郎の場合

これは、周知のことだが、芥川龍之介は第一高等学校の一年生の時、『遠野物語』を購入し読んでいた。その購入した本には、「一九一〇年一月三日 芥川文庫」と芥川の自筆での記入があると言う。友人宛てに、読後すぐ「此頃 柳田国男氏の遠野語(ママ)と云ふをよみ大へん面白く感じ候(全集第一七巻収録)との感想を送るほどであった。芥川が購入した『遠野物語』は「三百五十部ノ内第二五八号」であったことや、現在は北海道立アイヌ民族文化研究センターの山田秀三文庫に保管されていて、どうして山田の手許に芥川の本があったのかというほのぼのとしたエピソードは、私もすでに発表済みなのでここで詳述はしな

い。しかし、本稿のねらいにそって特筆するとしたら、次のようなことに触れないわけにはいかない。

この芥川が、『遠野物語』以降の読み物のなかで高く評価したのが、早川孝太郎の『三州横山物語』であったということである。芥川は、『澄江堂雑記』の「二十六 家」において、同書の巻末のまじないの歌を紹介したあと、次のように述べている。

「なほ次手に広告すれば、早川氏の『三州横山物語』は柳田国男氏の『遠野物語』以来、最も興味のある伝説集であらう。発行所は小石川区茗荷谷町五十二番地郷土研究者、定価は僅かに七十銭である。但し僕は早川氏も知らず、勿論広告も頼まれた訣ではない。」(『随筆』大正一三年三月、『芥川龍之介全集』第一〇巻)

芥川によって、『遠野物語』以来最も興味がある」と絶賛された同書について述べてみたい。同書は、小池の『小谷口碑集』と同じ炉辺叢書の一冊として、大正一〇年一二月に郷土研究社から刊行された。前述の『炉辺叢書解題』の柳田の位置づけからみてみよう。

「著者早川君が此村に生れたと云う唯一

つの理由で、文字以外の非常に豊富なる史料が、談話と為つて充ち溢れて居る土地であることが世に知られた。さうして之に準じて此地方一帯の平凡生活が、如何なるやさしみをもち、又如何なる美しさを味ひつゝあつたかを、一言の形容詞を備はずに、あらかた感得することが出来るのである。(略)若くは其等よりも更に不思議なる人の家の繁栄と衰微、どこからか来た人、どこへか行つた人、此等の見聞を語らず説かざる者は田舎には先づ無いと謂つてよい。而して早川君は熱心に久しく之を記憶して居つた。同君の本業が画家であつて、最も其感覚に忠であつたことは、殊に此書の幸福である。」

前述の『小谷口碑集』と同じく、柳田文庫には、柳田の書き込み本が保管されている。その表紙にも、「索引用」と書かれ、索引項目も同じように自筆で記入されているものである。その項目をいくつか拾ってみると、「草分け」「長者の屋敷址」「金堀り」「地の神」「河童」「隠れ里」「山犬」など、これも『遠野物語』を連想する項目が多いのに気づく。文章表現も、「四十年ばかり前に亡くなった、早川定平と云う男」など、

早川孝太郎も『遠野物語』の「目前の出来事」「現在の事実」を意識して記録していることがわかる。芥川は、ここに共通の面白さを感じたに違いない。

3、折口信夫の場合

『遠野物語』の方法を、民俗調査とその記述方法に意識的に取り込もうとした小池と早川の二冊について述べてきた。もしこの二人が永く柳田と共に歩んでいたら、民俗学の有様も少しは変わったかもしれない。しかし不幸なことに、小池は病魔、早川は柳田との確執で続くことはなかった。本稿の課題をそこから発展させるうえで、折口信夫との関係に触れてみたい。

折口は、昭和五年（一九三〇）八月、憧れの遠野に入り、喜善の家で柳田に手紙を書いている。

「廿年永く夢にこがれていました遠野へまゐりました。さうして昨夜は、佐々木さん家にとめて頂きました。日本ふくろあの高天原にはひつて行くけしきをなつかしくながめながらまゐりました。猿ヶ石川の水のたぎちには、車窓から省みせずにはあられませんでした。先生の御馬（実際は人力車）で来られた道に沿うて軽便で進むと

いふ事に、何かとすまない気もしましたが、明白に、それだけ先生がよい古代を御覧になつてゐたんだと思ふと羨ましくてなりませんでした。」（八月三十一日折口信夫柳田国男宛書簡、石井正己『柳田国男と遠野物語』三弥井書店刊より）

折口がこの書簡を出したころ、柳田と折口の関係は、民俗学会をめぐる、大きなずれが生じている時であった。この民俗学会とは、昭和四年に岡正雄、早川孝太郎らが設立した学会で、折口もその動きに乗り、実質柳田は孤立したかたちになっていた。このちょうど二カ月前の六月二十九日、柳田が長文の手紙を折口に送っている。それには、折口が参加した民俗学会を批判し、「フォークロアソサイタイ」と謂いつゝ記伝解釈の仕事をして居られたのでハ（略）小生は心苦しく候」「小生の苦情を御耳に入れ置候」とある。民間の伝承の採集と標本作成に任じるのが「フォークロア」であると自説を述べ、すでに学会はできてしまったのだから潰すわけにはいかないが、会員の心がけ次第と折口を牽制するのだった。折口の遠野からの書簡は、そのような流れのなかで読むべきであろう。「日本

ふおーくろあの高天原」は、柳田への敬愛の言葉だけでなく、自己弁明の意味も含まれていたのだと、私は思う。

このような経緯のなかにあっても、折口の『遠野物語』理解の振り幅は、他の誰よりも大きく深いものであった。それが解るのが、昭和一〇年（一九三五）七月三十一日、柳田国男還暦の誕生日に刊行された『遠野物語 増補版』に載せた折口の後記「初版解説」である。

『遠野物語』前記に見えた、高雅な孤独を感じしめる反語は、二十何年前、私どもを極度に寂しがらしたものである。其民俗学の世界にも、先生一代の中に、花咲く春が来て、赤い頭巾を着て、扇ひろげて立つておられる先生の姿を見る時が、こゝに廻り合わせて来たのである。此豊けさと共に、心は澄みわたるものゝ声を聞く。それは早池峰おろしの微風に乗るそよめきの様でもある。ざしきわらし・おしらさまから、猿のふつたち。おいぬのふつたちに到るまで、幽かにさゝやき合つてゐるのである。我が国の「心」と「土」とに、最即した斯学問の長者の為に、喜び交す響きに違ひない。寒戸の婆も、この風に馭して来るであらう。

故人鏡石子も、今日ごろはひそかに還つて、私どもの歓喜に、声合せてゐるのではないかと思ふ。昭和十年盆の月夜 折口信夫三礼」（郷土研究社、昭和一〇年七月三十一日刊）

柳田国男との関係を修復して、民俗学講習会の準備も一段落したところ書いたものである。「最も即したこの学問の長者」と柳田国男に最大限の敬意を払った折口は、この後、有名になった長詩「遠野物語」を発表する。その最後の連の前から引用してみたい。

「早池峰の雲とそよりて、猿个石の湍ちと深く仰ぎ見も、俯みも及かぬ。三分しんのらんぶ搔上げて、さ夜深く読み立つ声の わが声を屢々ひそめ、若ければ、涙たりけり。遠野物語のうへに」

（『ドルメン』第五巻第一号、昭和一四年一月）
このように折口と柳田は、前述の小池や早川の『遠野物語』理解とは違う位相で共鳴している。柳田にとっては心強い折口との関係も、昭和二八年、折口が先に亡くなったしてしまうことで断絶する。その時の柳田の悲しみを、私は、前述の拙稿「柳田国男年譜」で次のように表した。

「九月三日 折口信夫が講義中に倒れ、急死したと岡野弘彦が知らせに来て、自分より早く死ぬということがあるものかと、悲しさのあまり全身の力が抜ける。（略）九月五日 折口の葬儀に参列せず、終日家に籠もって本を読む。（略）」

九月一日 折口が私財を投じて続けてきた郷土研究会を再興するために、国学院大学第一研究室で三〇年前の思い出や折口と自分の研究方法の違いなどを講義する。（略）

九月二日 国学院大学折口研究室における折口信夫追悼祭に参列する。神道宗教学会主催の追悼講演会で「わがとこよびと」を講演し、折口と心ゆくまで死後の問題について語り得なかつたことが心残りとする。（前掲『柳田国男全集』別巻Ⅰ）

本稿の目的から少し外れたようだが、柳田が「心ゆくまで死後の問題」、別の言葉で言えば「魂の行方」を語り得なかつたことと残念がっていることを示したいがためである。しかし、柳田がどのように悔やもうが、『遠野物語』理解で深いところで共鳴していた限りにおいて、それほど悲観することではなかつたのではないかと思う。

三、『遠野物語』を民俗誌の視点から読む

1、増補版刊行時の柳田の思いから

明治四三年（一九一〇）六月一四日、『遠野物語』が刊行されてから四半世紀たった昭和一〇年が前述の『遠野物語 増補版』の刊行年である。還暦記念としての講習会と、『遠野物語 増補版』の刊行は、折口ら柳田のもとに集まる民俗学者からの記念企画であった。と言うよりも、単なるお祝いではなく、全国の同志の結集を願ひ、『遠野物語』の続編を出版したいと思つていた柳田の思いが実現したものと云つてよい。この時の柳田の思いは、「再版覚え書き」によく表れている。

「わずか一世紀の四分の一の間にも、進むべきものは必然に進んだ。これに比べるとわれわれの書齋生活が、依然として一見一聞の積み重ねに苦勞していることは、むしろ恥じかつ歎かねばならぬのである。少なくとも遠野の一溪谷ぐらゐは、いま少しく説明しやすくなつていてもよいはずであったが、伊能翁はまず世を謝し、佐々木君は異郷に客死し、当時の同志は四散して消息相通せず、自分もまた年頃企てていた

広遠野譚の完成を、断念しなければならなくなっている。かくのごときは明らかに蹉跎の例であって、毫も後代に誇示すべきものではない。嗣いで起こるべき少壮の学徒は、むしろこの一書を繙くことによって、相戒めてさらに切実なる進路を見出そうとするであろう。それがまたわれわれの最大なる期待である。昭和十年六月 柳田国男

なかなか奥深い柳田の言葉だが、本稿のねらいから見落とせない一文が、「少なくとも遠野の一溪谷ぐらゐは、いま少しく説明しやすくなっているといふよりはむしろ『遠野物語』はなぜ書かれなければいけなかったのかの論議は、私も含めて多くの論者によって語り尽くされてきたと言える。そのなかで、いつも端に追いやられていた視点が、この一文にあるのである。もちろん、二五年の年月、そして、この間進んできた郷土研究、方言、昔話研究の成果によって、柳田自身の『遠野物語』への期待が変化してきたことも勘案しなければならぬであらう。しかし、その上で、この言葉の意味を現在の研究水準に即して問い直したいというのが、本稿のねらいである。

2. 民俗誌としての内容分類から

「遠野の一溪谷ぐらゐ」とは、「七内八崎」の「一つの内ぐらゐ」と解釈し、改めて『遠野物語』を読み進めてみると、「栃内」「来内」「西内」といった地名の多さに驚く。「表1」は、『遠野物語』を遠野郷の民俗誌と仮に設定した時に見えてくる全体像である。字地名までに限ってみても、「郷名、村名、字名」が六五、「小名、通称地名」と言えるものが二〇で、合計八五に及ぶ。「神、その他」の項目以外の山、川、峠名などを入れると、一三三にもなる。一一九話の中で、これらの項目名が無い話を「昔話」と言い切ってもよい程である。今までの『遠野物語』研究においても、「事実譚」としての『遠野物語』の根拠として、多くの論者から指摘されてきたことではある。しかし、「一溪谷ぐらゐは、少しく説明できる」民俗誌としての角度から改めて見てもらいたいと「表1」を作成した。

3. 登場人物の相関関係図から

当然、この表には、「人名」の項目もなければならぬが、表2に示す『遠野物語』登場人物等関係図」と重複するので割愛した。この関係図は、私が増補を繰り返して

ようやくここまでわかってきたという途中経過のものである。菊池照雄、遠野常民大、遠野物語研究所、遠野市立博物館などの先行研究のおかげでわかったことを表にしただけのものではあるが、『遠野物語』の新たな読解に少しは役立つのではとここで発表することとした。(登場人物だけではなく、佐々木家や長根家の現在に至る家系図も載せさせていただいたことをこの場を借りてお礼を申し上げたい。当然、不備や誤りも多々あり、加筆しなければならぬことが、これからも増えていくことが考えられるので、読者の皆さまからのご指摘をお待ち申し上げる。)

この人名も、実名が二〇名ほど「何某」「民家の娘」など実名でないものを入れると七〇名に近い人物が登場していることがわかる。地名項目と合わせると実に二〇〇を超える数となる。「一溪谷ぐらゐは」という柳田の意図に沿って、土淵村栃内だけの地名、人名を絞って論を進めたいところだが、この作業は今後の課題としたい。

四、まとめ

以上が、『遠野物語』を遠野郷の民俗誌

として読んでみようと思いた結果である。その際、『遠野物語』を民俗、口承伝承の採集記録として読み、自らの採集技術として取り入れようとした小池直太郎、早川孝太郎との比較、『遠野物語』から古代をみつけようとした折口信夫との交流についても指摘させていただいた。拙い文章ではあるが、今後、特に遠野大会への問題提起はできたいかと思う。

これからと言う時に、火災に
あ、大事な資料を焼失したあ
げく、村に居られなくなった小
池の悲しみや、柳田との関係を
修復できずに、その後は農業後
継者の指導に専念し、その教え
子たちに民俗学者早川孝太郎の
人生を語ることがなかったとい
う早川の無念についても、別の
機会に詳述したいと思う。

(本誌編集長、
『柳田国男全集』編集委員)

表1 『遠野物語』分類項目一覧表 (人名は別表)

分類	数	項目名 () 内の数字は『遠野物語』の話の番号 (村名は時代の重複あり)
地名 (郷、村、 字名)	65	遠野郷 (1, 5, 6, 8, 12, 26, 31, 41, 50, 59, 73, 80, 84, 88, 98, 118, 119)・遠野保 (1)・ 上閉伊郡 (1, 64)・下閉伊郡 (27)・遠野町 (1, 27, 68, 87, 91, 96)・土淵 (1, 12, 15, 67, 68, 69, 74, 77, 92, 99)・(土淵村) 山口 (12, 67, 70, 74, 77, 78, 83, 111, 112, 114)・ 山口村 (4, 5, 29, 36)・(土淵村) 大字柏崎 (15, 26, 85, 108)・(土淵村) 大字飯豊 (17, 70, 97, 110, 111, 112)・飯豊村 (42)・本宿 (86)・下栃内 (86)・土淵 (88, 111)・火石 (99)・丸古立 (102)・五日市 (110)・新張村 (55, 78, 110)・来内村 (2)・栃内村和野 (3, 93, 113)・和野村 (60)・栃内村林崎 (46) 同琴畑 (72) 同西内 (73)・同野崎 (81)・栃内 村 (64, 74)・和山 (5)・似田貝 (68)・恩徳 (76)・長者屋敷 (34, 75, 76)・星谷 (112)・ ホウリョウ (112)・附馬牛 (1, 2, 28, 65, 108, 110, 111)・同荒川東禅寺 (111)・同火渡 (111)・ 松崎 (1, 8, 55, 90, 94)・寒戸 (登戸) (8)・青笹 (1, 6)・同大字糠前 (6)・同中沢 (111)・ 上郷 (1, 7, 43, 56, 107)・小友 (1, 38)・綾織 (1, 91)・鱒沢 (1)・宮守 (1)・達曾部 (1, 2)・ 甲斐国 (24)・花巻 (1)・宮古 (27)・小国村 (30, 63, 64)・橋野 (44, 67, 93)・栗橋 (93)・ 大槌 (51) 大槌往還 (78)・盛岡 (53)・川井村 (54)・金沢村 (64)・足洗川村 (68)・田ノ浜 (5, 99)・吉利吉里 (5, 100)・釜石 (84)・山田 (84, 106)・船越 (84, 99, 100)・豊間根村 (101)
地名 (小名、通称 地名他)	20	馬次場 (5)・大谷地 (9, 41)・留場の橋 (17)・原台 (腹帯) の淵 (27)・死助 (32, 41, 50)・ オバヤ (板小屋) (42)・緒持の滝 (47)・姥子淵 (58)・相沢の滝 (58) 大洞 (63)・続石 (91)・貞任 (67)・象坪 (94)・小浦 (99)・ダンノハナ (111, 112, 114)・ 蓮台野 (デンデラノ) (111)・蝦夷屋敷 (112) 寺屋敷 (114)・砥石森 (114)・(七内八崎)
屋号等	7	大同 (14, 24, 25, 69, 70, 83)・池の端 (27)・ハネト (29)・川端の家 (55)・新屋の家 (58)・ 田圃の家 (26, 70)・河ぶちのうち (107)
地名 (山、森名)	18	早池峰山 (2, 27, 28, 29, 30, 6, 91, 98)・六角牛山 (2, 5, 42, 43, 44, 46, 47, 61, 91, 93, 98)・石神 (上) 山 (2)・根子立 (4)・五葉山 (7)・物見山 (27)・鶏頭山 (前薬師) (29)・ 千晩ヶ岳 (32)・片羽山 (32)・白望山 (33, 34, 35, 64)・離森 (34, 75)・ニツ石山 (36)・ 死助の山 (50)・八幡山 (68)・糠森 (76)・天狗森 (90) 向山 (91)・ジョウヅカ森 (113)
地名 (川、沼名)	7	北上川 (1)・猿ヶ石川 (1, 55, 91)・閉伊川 (27, 54)・小国川 (54)・小烏瀬川 (58, 68, 72, 86)・鳴川 (68)・早瀬川 (107)
地名 (峠名)	4	笛吹峠 (5, 93)・境木峠 (越) (5, 9, 13, 37, 41)・和山峠 (37)・仙人峠 (48, 49)
地名 (城、館名)	6	横田城 (1)・安倍ヶ城 (65)・安倍館 (68)・厨川の柵 (68)・八幡沢の館 (68)・貞任が陣屋 (68)・ ボンシャサの館 (114)
神社、祠、 寺院名	6	伊豆権現 (2)・稲荷の祠 (21)・薬師堂 (21)・死助権現 (32)・常堅寺 (88)・キセイ (喜清) 院 (97)
神、その他	7	オクナイサマ (14, 15, 70)・オンラサマ (14, 69, 70)・コンセサマ (16)・オコマサマ (16)・ ザシキワラシ (17, 18)・カクラサマ (72, 73, 74)・ゴンゲサマ (110)

